

聖週間を間近に控えていろいろな問題で頭の中がいっぱいの時、あるホームレスの人が教会を訪ねてきた。このよつなどは温かい対応ができないもの。いやいやながら話を聞いている自分がよく見えて、それもまた嫌だった▼聖堂から外に出て、その人に草取りをお願いしているところに、もう一人の人が現れた。半年ぶりに会う人だった。「神父さん、相当疲れているね。鬱(うつ)じゃないの? 前、会った時と全然違うよ。いろ

いろ悩みがあるみたいだね。こんなときは、あつたかい缶コーヒーでも飲んで気分転換しなくちゃ」。そう言つと、自分が乗ってきたバイクのと

## 地の塩

い」と言つて六百五十円を差し出した▼彼は話した。「神父さんも大変でしょう。いろんな人の悩みを聞いて疲れるでしょう。そんなときは無理をしないで、自分も疲れてる、と言つた方がいい。そうでない、と結局、相手に対しても失礼になるし、いい解決も生まれない」。つい今しがた対応していた自分の姿を見透かされていたような気がした。「神父さんが一生懸命がんばっているのは知ってる。教会にはい

て、一人ひとりとは違つている、ということを原点に、開かれた教会づくりをしようとしていることも知っている。でも、神父さん自身は、心底、そのことを受け入れていない。結局は、人を自分に合わせよつとしている。神父さんが、そこから本当に解放されると、もっと楽になるよ」▼三日後、手紙が来た。中にはノートの切れ端に包んだ千円札が入っていた。「これで温泉にでも入つてゆっくりしてください」